

## 溶融亜鉛めっき業を取り巻く状況

平成 25 年 6 月

一般社団法人 日本溶融亜鉛鍍金協会

昨年の政権交代以来、デフレ脱却のために種々の政策が取られていますが、その結果は株高、円安に現れており、一部には日本経済復活の期待感も出てきています。溶融亜鉛めっき業が深く関わる建築・土木分野でも、設備投資、インフラ整備、復興需要等で、今後の需要は上向きと期待されています。

溶融亜鉛めっきは、鋼構造物の防錆を通じて社会インフラ長寿命化の役割を担っており、安心・安全な社会の構築には必要不可欠な技術です。ところが、ここ数年の受注は 100 万トン強のレベルで推移しており、これは近年のピークであった 1996 年度の半分、全国設備能力の 3 分の 1 程度の生産レベルに落ち込んでいます。これは、建築・土木工事の発注減とともに、過剰な工事費低減要求により、鋼材の防錆を省略、ないし安価な技術に代替されたことも一因と考えられ、日本の社会インフラにとって極めて憂慮すべき事態と考えております。溶融亜鉛めっき業界としても、この間最大限の自助努力によりコスト低減を実現し、何とか社会のニーズに応えるべく努力をして参りましたが、昨今の円安によるエネルギー価格、原材料価格の高騰は、その努力範囲を超えたものとなっており、溶融亜鉛めっき業の経営圧迫は深刻度を増している状況にあります。

溶融亜鉛めっきは、文字通り亜鉛を溶融状態にしてめっきをする作業であり、金属の亜鉛を常に溶融状態に保っておく必要があります。そのためには、亜鉛の入った釜の温度を 4 百数十度以上に保持することが必要であり、莫大なエネルギーを消費いたします。また、めっき作業には長年培われた技能が必要であり、良質なめっき製品を提供するにはかなりの人手を必要といたします。従って、溶融亜鉛めっきの加工賃は、他の技術、例えば塗装に比べて割高になるのは否めません。しかし、溶融亜鉛めっきの防錆能力は他の技術に比べて圧倒的に高く、しかも一度加工するとその後のメンテナンスの必要がなく、トータルコストとしては割安になり、社会インフラの信頼性を高めるためには最適な技術であると確信いたしております。

現下での加工賃の低減要求下では、良質なめっきのためのエネルギー、原材

料、人材の確保はきわめて難しく、溶融亜鉛めっき業の経営が危ぶまれる事態が懸念されております。溶融亜鉛めっき業が健全に経営できないということは、鋼材の防錆技術が担保されないことであり、社会インフラの整備にとって極めて重大な影響を及ぼすことになると思います。また、一度失われた技術を取り戻すことは不可能であり、まさに「今！」溶融亜鉛めっきの公正な評価が必要であり、安定した溶融亜鉛めっき業の基盤を構築すべき時であります。関係各位には是非溶融亜鉛めっきをご理解いただき、ともに健全な社会インフラ構築を進めていきたいと考える所存でございます。

(一社) 日本溶融亜鉛鍍金協会について

一般社団法人 日本溶融亜鉛鍍金協会は、「安心・安全なインフラの構築」のために、各地での講演会の開催等、溶融亜鉛めっきの理解、普及活動に取り組んでいます。是非この機会に下記ホームページをご覧ください、溶融亜鉛めっきについてのご理解をいただければ幸いです。

日本溶融亜鉛鍍金協会ホームページ

<http://www.aen-mekki.or.jp>